

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

発起せしめたまひけり

(『高僧和讃』聖典四九六頁)

釈迦弥陀は慈悲の父母

第1組 圓照寺前住職

仁禮 文秀

text by Bunsyu Nirei

1 心を動かす春の花たち—小説「名前」より—

走っても走っても桜はとぎれなかった。ときおりはらはらとこぼれ、薄桃色の花びらがタクシーの窓にぺたりと貼りついた。

桜の花は、満開になるとなぜか動きを止めたように見える。昼間でも発光している特殊な明かりみたいに見える。

春だ、と今さら気づいたかのように思った。薄桃色の桜が頭上を覆い、その向こうに澄んだ青空があり、視線を落とせば、道端に黄色い菜の花が風に揺れていた。

2 「名前」は親からのプレゼント

角田光代さんの短編集『P r e s e n t s』のはじめに置かれたのは「名前」と題した小説。主人公は春子、周囲の友はいかにも意味ありげであり、美しい響きさえ感じられる名前が連なる中、自分だけがありきたりのようで不満が募るのです。母親に尋ねたら、「あなたは春に生まれたのです」という答え。思い余って春海^{はるみ}にしようとみんなに伝え、しばらくは春海と呼ばれていたものの、やはり春子は春子と気づきます。

こんな幼き日の出来事を経て、今春子は一児の母になり、里の母親から腹帯が送られてきました。そして帯の中から「赤ちゃんの名前のつけ方」という古

びた冊子を見つめます。そして春の項目の中に、たくさんの鉛筆による○印を見つけ、春子にあっては何重もの○印が付けられ、今更ながら母の思いに気づいたのです。

母は春の美しさを既に知っていました。その感動を子に伝えたい一心で、「春子」と名前をつけたのでしょう。今まさに生まれんとするわが子と病院に駆けつけるタクシーの窓から、春子なる名前が温もりあふれる初めてのプレゼントであったことに気づいたのです。

3 善導大師を讃えた親鸞さまのご和讃

温もりあふれる親心と聞くと、善導和讃の「釈迦弥陀は慈悲の父母」の一首と重ね合わせて、不思議な感動を覚えます。慈悲の働きから言えば、大悲・中悲・小悲との別はありますが、『般舟讃』の中で「父母」と表現されたことによって、慈悲なる心に育てられたわたしが、より確かなうなづきになります。わたし自身の七十三年、心に起きてくる実に多くの感情を経験してきました。悩みの果てに不満があり、がんばりの果てに悲しみがあり、多くの試練の場が周囲の人々と共感しあう大切な機縁であったと気づくのは、「善巧方便」という慈悲の働きにうながされ、気づき得る日まで如来さまはこのわたしを見離さなかったのです。

更にまた「無上の信心の発起」ということも、「大悲のころをみ名にぞあらわし」と「正信讃」に詠われるように、「なむあみだぶつ」と、ことばを以ってわたしに呼びかけ、その呼びかけに気づくのは、苦悩の日々のさ中でのことです。自分の心がけを離れて、凶らずも聞きとれた呼びかけに「なむあみだぶつ」と応え得るのです。いつ、どこにあってもし呼びかけられているのです。いつ、どこにあってもし応え続けて歩みましょう。応えて歩む人には「増上縁」として報恩の思いが具わることを善導大師は伝え残して下さいました。うれしく思います。

5月の「母の日」。アンナ・ジャービスさんが母アンさんの慈愛に満ちた人生に学んで全ての母を讃えることから始まりました。